

ハワイ・ホノルルで特別展「ひめゆりとハワイ」開催

2023年9月2日・3日、当館付属ひめゆり平和研究所は、ハワイ・ホノルルで特別展「ひめゆりとハワイ」を開催しました。会場はハワイ・コンベンションセンターで開催された「オキナワン・フェスティバル」(ハワイ沖縄連合会主催)の一角でした。

平和研究所は、沖縄県・沖縄県文化振興会の助成を受け、2019年に海外発信のプロジェクトをスタートさせました。第一歩として、沖縄県系人が多く、「ひめゆり」とのつながりも深いハワイでの展示会を計画し、現地でのリサーチを進めていました。新型コロナの世界的流行により一度断念しましたが、改めて開催を模索するなか、ハワイ沖縄連合会をはじめ多くの方々のサポートを得て実現の運びとなりました。

2日間で約700人が見学し、ハワイ州グリーン知事や沖縄県系3世のイゲ前知事も訪れるなど大変好評でした。見学者から「こんなに悲惨なことがあったとは知らなかった」「当時なにが起きていたのかを学ぶのはとても大切なこと」「もっと学びたい」などの感想が寄せられ、海外で伝えることの手応えを感じました。

同特別展は、ハワイ大学西オアフ校図書館に場所を移し開催中です。2024年1月12日には会場で当館の学芸職員が現地の若い世代を対象にワークショップを行う予定です。



「ひめゆりとハワイ」展示会場の様子

◆特別展「ひめゆりとハワイ」開催情報

*2023年9月2日・3日：オキナワン・フェスティバル会場特設ブース(ハワイ・ホノルル)

*2023年9月5日～2024年1月31日：ハワイ大学西オアフ校図書館 (James & Abigail Campbell Library)

「Himeyuri and Hawaii Opens September 5」➡



CONTENTS 目次

- | | | | |
|----------------------------------|----|------------------------------|----|
| ◆ ハワイ・ホノルルで特別展「ひめゆりとハワイ」開催 …………… | 01 | ◆ 館長レポート「スペイン・ゲルニカ訪問の旅」…………… | 08 |
| ◆ 特別展「ひめゆりとハワイ」展示構成 …………… | 02 | ◆ 2023年度博物館実習生レポート紹介 …………… | 12 |
| ◆ トピックス …………… | 02 | ◆ 仲宗根政善日記抄(67) …………… | 14 |
| ◆ 資料館の動き …………… | 03 | ◆ 本棚(仲程昌徳) …………… | 15 |
| ◆ コラム相思樹 …………… | 03 | ◆ ホームページが新しくなりました …………… | 16 |
| ◆ 「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」実施報告 …… | 04 | | |

■ 特別展「ひめゆりとハワイ」 展示構成

Chapter1 Himeyuri and the Battle of Okinawa (1章 ひめゆりと沖縄戦)

- 1 The Himeyuri Schools (ひめゆりの学校)
- 2 Mobilization and battlefield nursing (戦場への動員・看護活動)
- 3 Retreat to the South (南部撤退)
- 4 The Himeyuri after the war (ひめゆりの戦後)



1章 ひめゆりと沖縄戦

Chapter2 Himeyuri in Hawaii (2章 ハワイのひめゆり)

- The Himeyuri have a number of ties to Hawai'i (ひめゆりとハワイは、いくつもの縁でつながっています。)
- Uchinanchu immigration to Hawai'i (ハワイに渡ったうちなーんちゅ)
- Himeyuri teacher, Chiyoko Oyadomari (ひめゆり学徒隊の引率教師 親泊 千代子先生)
- The "Himeyuri boom" in Japan and Hawai'i (日本とハワイでの「ひめゆり」ブーム)
- The Himeyuri who relocated to Hawai'i (ハワイに渡ったひめゆり学徒)
- ・ Himeyuri alum, Keiko Fukuda (ひめゆり同窓生 福田経子さん)
 - ・ Himeyuri student survivor, Fumiko Suetomi (ひめゆり学徒隊生存者 末富文子さん)
- The Hawai'i Himeyuri Association (ハワイのひめゆり同窓生)
- The Himeyuri Cenotaph and Harry Shinichi Gima (ひめゆりの塔と沖縄系ハワイ二世 ハリー・儀間真一さん)



2章 ハワイのひめゆり

展示内容は特別展「ひめゆりとハワイ」
ホームページでご覧頂けます。

<https://himeyuri-and-hawaii.com>



T O P I C S [トピックス]

■ 「ひめゆりの塔慰霊祭」4年ぶりに通常開催

2023年6月23日、「ひめゆりの塔慰霊祭」を挙行了しました。今年は、2019年以来4年ぶりの通常開催となり、約170人のご遺族やひめゆり同窓生、関係者が参列しました。コロナ禍以降、久しぶりに参列されたご遺族も多く、家族と共に展示を見学する様子が見られました。

きょうだい世代に代わり、甥や姪にあたる方々が参列する姿もありました。世代が変わっても変わらず参列し、慰霊祭という場を大事にするご遺族の思いが伝わる1日となりました。



4年ぶりに多くの人が参列した慰霊祭

「第6回“ひめゆり”を伝える映像コンテスト」作品募集

ひめゆり平和研究所では「第6回“ひめゆり”を伝える映像コンテスト」の作品を募集中です。テーマは「ひめゆりと〇〇(自由選択)」。ひめゆり学徒隊や沖縄戦について、あなたが学んだり、考えたりしたことを映像で発表してみませんか。表現方法は自由。プロ、アマ、年齢は問いません。ふるってご応募ください。

締め切りは2024年1月8日(月・祝)必着です。

詳細はこちら



■ 資料館の動き (2023年5月～11月)

- 5月 当館主催「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」を5月1日に県立南部商業高校・やえせ高等支援学校で、5月20日に県立向陽高校で実施。学芸課長の古賀徳子が講師を務める。
- 5月27日 沖縄戦の記憶継承プロジェクト（同プロジェクト主催・於：琉球新報社）の第4回の講師を館長の普天間朝佳が務める。8月26日の第10回の講師を説明員の仲田晃子が務める。
- 6月 9日 県立豊見城高校にて館長の普天間朝佳が平和講話を行う。
- 6月23日 ひめゆりの塔慰霊祭挙行
- 7月 1日～7日 博物館実習受入
- 8月 8日 沖縄県主催ウチナージュニアスタディツアー 平和学習受入
- 8月14日 第11回国際平和博物館会議で、平和研究所の取り組みをオンラインで報告（担当狩俣英美）
- 8月16日・17日 県立中堅教諭等資質向上研修 選択研修受入
- 8月19日 糸満市平和の語り部育成事業受入
- 8月21日 糸満市教育委員会初任者・中堅者研修の一環として平和学習を実施
- 8月10日・24日・27日 「見学に役立つガイダンス」（計4回）実施
- 8月28日 リサーチ型プロジェクト「message in a bottle—島の暮らし、島からの発信」内講座「語り継ぎの物語を描いてみる」（於：沖縄県立芸術大学）に説明員の尾鍋拓美がゲスト参加
- 9月 2日・3日 オキナワン・フェスティバル（於：ハワイ・ホノルル）にて特別展「ひめゆりとハワイ」開催
- 9月 4日～12日 「ゲルニカ訪問とピカソの「ゲルニカ」9日間」（株式会社たびせん・つなぐ主催）に館長の普天間朝佳同行
- 9月 5日 ハワイ大学西オアフ校図書館（ハワイ）にて特別展「ひめゆりとハワイ」開催（～2024年1月31日）
- 9月16日～18日・23日・30日 「見学に役立つガイダンス」（計9回）実施
- 9月19日 特別展「ひめゆりとハワイ」のハワイ開催報告会
- 9月30日 （一社）沖縄県女性の翼の宿泊研修会（於：恩納村）で館長の普天間朝佳が基調講演を行う
- 10月14日 沖縄県主催沖縄平和啓発プロモーション事業「高校生国際平和ワークショップ」（於：JICA沖縄）の講師を学芸課長の古賀徳子が務める
- 11月 9日 第30回日本平和博物館会議に館長の普天間朝佳がオンライン出席

コラム 相思樹

ガイダンス

説明員 尾鍋拓美

8月と9月に、一般の来館者対象の「見学に役立つガイダンス」を、学芸課職員3名で初めて実施しました。

ガイダンスでは、当館の紹介ムービー（3分）を見てもらいます。その映像に出てくる島袋淑子さんの話を振り返りながら、ひめゆり学徒隊の3か月の戦場体験を約20分で紹介するという内容です。

ガイダンス中は、展示室にある、ひめゆり学徒隊の体験を描いた絵などを見せながら話をします。見学の時に展示室であらためて絵を見てもらうと、ひめゆり学徒隊のどのような局面を表している絵なのか、よりわかりやすくなるのではないかと思います。

夏休み期間でもある8月は、ご家族で来館される方が多く、幼児から高齢の方まで幅広い年齢の来館者がガイダンスを聞いてくれました。特に島袋さんが、動けない学友たちを残して壕から出て、その後、残された人たちがどのように亡くなっていたのかを知った時、とても辛かったという話は、どの年齢の方もとても集中して聞いているのが伝わってきました。

見学前のガイダンスが、来館者の疑問の解消や、学びを深める手助けになるよう、ガイダンスの内容もどんどんブラッシュアップしていきたいと思っています。

「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」実施報告

ひめゆり平和祈念資料館学芸課長 古賀徳子

取り組みの経緯

ひめゆり平和祈念資料館では、今年5月、沖縄の3つの学校と連携して、「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」を実施した。高校生が沖縄戦を伝える側になってみることや、その経験を通して学びを深めることを目指して、資料館として初めて行った取り組みである。6月には県立向陽高等学校で生徒有志による展示ガイド、県立南部商業高等学校・やえせ高等支援学校（併置校）で図書委員・図書班の生徒によるワークショップが実施された。

資料館では、2012年から夏休みに教員向け講習会を開催し、写真を読み解く「フォトランゲージ」（開発教育協会の教材）などのワークショップを行っている。参加者から「興味、関心を持って展示室を見て回ることができた」という感想が寄せられるなど、手応えを感じていたが、会場や人員の関係で、来館する学校団体への実施は難しかった。

2018年には、オランダにある「アンネ・フランク・ハウス」の映像制作ワークショップ「メモリーウォーク」を行った。「メモリーウォーク」の大きな特徴は、若い世代が仲間と協力して、映像を制作する過程で、自らが伝える側になるところである。その後、資料館は、参加者が伝える側になることを意識して、映像制作ワークショップや映像コンテストなどの企画に取り組んできた。

2022年には、県内では初の移動展を今帰仁村と読谷村で開催し、会場でワークショップを行った。移動展のパネルを使って行うのは初めてだったが、開発教育に詳しい玉城直美さんの助言で、「ひめゆり入門 Q&A」などの新しい内容も加わり、理解が深まったとの感想が寄せられた。

こうした経験を重ねる中で、資料館が団体に貸出しているパネル「沖縄戦とひめゆり学徒」を使って、県内の高校生が同世代にガイドをする取り組みができないかと考えた。そのアイデアの元になったのは、「アンネ・フランク・ハウス」が巡回展の開催地で行う「ピア・ガイド」のためのトレーニングである。ピア（peer/仲間）とは、同世代や同じような経験を持つ人を表す言葉。アンネ・フランク・ハウスでは、ピア・ガイドが、見学に訪れた若者グループに説明や問いかけを行うことで、対話を促進することを期待している。

沖縄では、6月の慰霊の日に合わせて、沖縄戦のパネル展を行う学校が多い。もし、パネル展を活用したピア・ガイドのトレーニングが実施できれば、自分の言葉でひめゆりや沖縄戦を説明できる人が増えるうえに、パネル展が生徒同士の対話の場となる。そんなことを考えていた時、ひめゆりに関心を持ち、見学に訪れた向陽高校の生徒や先生と出会い、一緒にやってみるようになった。

沖縄県立向陽高校の生徒有志による展示ガイド

向陽高校では、沖縄県のワークショップや沖縄平和賞授賞式に参加した生徒が中心となって、学校でワークショップを企画したり、グループで資料館を訪問したりと、自主的な活動を行っていた。今年3月に担当の妻夫木麻紀子先生に企画を提案すると、「同世代と話そう、平和について」をテーマに、学校として積極的に取り組んでくれた。校内で参加希望者を募り、5月20日に「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」（3時間）を実施した。休日にも関わらず、自主的に34人の生徒が参加し、①フォトランゲージで沖縄戦の特徴やひめゆり学徒の体験を学ぶ、②コミュニケーションの練習、③写真やイラストを使ってガイドを行う練習を行った。終了後のアンケートにはこのような感想が寄せられた。



向陽高校でのワークショップ 2023年5月20日
写真提供：沖縄県子ども生活福祉部女性力・平和推進課

まだ知らないことがたくさんあると気づいた

- 今まで平和学習をしてきたけれど、初めて平和ガイドとしてのワークショップを受けて、改めて自分の沖縄戦に対する知識の少なさに気づいた。
- 小さい時から沖縄戦について学んでいてもまだまだ知らないことの方が多くて 沖縄戦というカテゴリーはひとつでもその中にはたくさんの出来事があることを実感して それらの出来事をひとつでも多く後世に伝えていきたいと思った。
- いざ自分が伝える側となる講話を受けてみるとまた違った考え方や見え方ができて 今まで以上に知識が深まったと思う。

フォトランゲージをやってみて

- 絵や写真から場面や人物の状況を読み取っていくのは 外しまくりだったけど楽しかった。
- フォトランゲージでは以前に見たこともある写真があったが (略)、写真だけでは伝わらない詳細を説明によって知った時には鳥肌が立つぐらい驚きました。
- たった一つのイラストかもしれないけれど、そこにはいろんな戦争の背景が隠されていること (略)、グループワークでこのイラストについてどう思うか話し合いをして、自分には無い意見を聞くことが出来て凄くいい機会だったと思う。

聞き手の興味を引き出すことを学んだ

- ガイドする時に相手に興味を持ってもらったり、伝えるときにどこに注目するかを学ぶのは初めてだったのでとても興味深かったです。
- 発表をする時、どのように聞き手の興味をひきつけられるかを学び、コミュニケーションを大切にしながら説明することができて良かった。
- 話し合っって考えを提供し合うのは全員の積極性を出すのに有効だと思えたので ガイドとして活動するときには相手の知っていることを上手く引き出す質問・対話形式を心掛けたい。

その後、生徒たちはパネル展やガイドの準備を行い、6月には訪れたクラスメイトや友人にガイドを行った。7月の文化祭でも、パネル展と来場者への展示ガイドを行った。10月には、修学旅行で訪れた横浜商業高校の生徒にパネル展のガイドを行い、「戦争と子どもの人権」というテーマでディスカッションをした。

私も6月13日にガイドの様子を見せてもらったが、ガイドの生徒が自分自身の疑問や関心をもとに普段の口調で説明や問いかけを行うため、聞く側の生徒は構えずに率直な感想や疑問を口にしていた。そして、「自分と同じような疑問をもって説明してくれたのわかりやすかったし、もっと知りたくなった」と感想を語っていた。ガイドの生徒も「自分

では考えたことのない意見が聞けて、とても楽しかった」「お互いにコミュニケーションを取りながら考えを深めていけた」と話していた。

向陽高校の実践では、生徒がピア・ガイドを行うことによって、①沖縄戦への理解や関心が高まる、②自分の言葉で伝える力や人の意見を引き出すスキルが身につく、③伝える経験をすることで、沖縄戦を伝える役割を担うのは体験者や専門家だけでなく、自分たちでもあるという意識が芽生えるなどの成果が見られた。

なお、向陽高校の実践は、琉球新報、沖縄タイムスの他に、2023年6月23日朝のNHK「おはよう日本」で取り上げられ、注目を集めた。



向陽高校の生徒によるガイド 2023年6月13日



向陽高校の生徒によるガイド 2023年6月13日

沖縄県立南部商業高校・やえせ高等支援学校の図書委員・図書班の生徒によるワークショップ

南部商業高校・やえせ高等支援学校の図書委員会は、昨年度、「沖縄戦」×「SDGs 壁新聞」の発表と、「私たちにできる平和のつくり方」をクラスで討議し、その内容を図書館で展示した。図書委員会顧問の下地孝子先生に連絡を取ったところ、ちょうど今年は「沖縄戦を語り継ぐ」をテーマにするとのことで、連携して取り組むことになった。図書委員の生徒が自分のクラスでワークショップの進行を行うことを目標にした。全校集会ではなく、クラスごとに行ったのは、「県民の約9割が戦後生まれとなり、沖縄戦の記憶継承が一層難しくなる中、生徒が同世代と沖縄戦について学び合い、自分事として考える機会をつくることが重要であり、生徒自身に沖縄戦を伝えていく経験をさせたい」という下地先生の思いがあったためである。

5月1日の放課後、図書委員や平和同好会の生徒34人を対象に、「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」(75分)を行った。時間の都合で、コミュニケーションの練習は省略し、「ひめゆり入門Q&A」と「フォトランゲージ」「わたしの気持ち」というワークを行った。下地先生は、生徒の様子を見て、『文字』情報だけでなく『写真やイラスト』を用いて問いかけるという手法は、やえせ高等支援学校の生徒にとっても汎用性が高く、本校でも実施できるという手応えを感じたとふりかえる。参加した生徒たちは、下地先生や司書の柳堀夏乃さんのサポートのもとで、6月の本番に向けて放課後の練習に取り組んだ。

6月14日当日は5・6校時を使って、図書委員と図書班

の生徒66人が進行役を担い、全校の各教室(15クラス)でワークショップとアニメ「ひめゆり」の上映を行った。授業を終えた生徒たちは、「クラスメイトに発表する事でどのような事が起きたかさらに理解を深める事ができたと思う」(3年)、「戦争についての情報を伝える側に初めてなってみて、これを伝えるのがどれだけ大変か断片的に知ることができました。想像を絶する辛さを伝えてくれた方々に敬意を表したい」(3年)、「沖縄戦の恐ろしさを伝えられたか心配になった」(1年)、「やっぱりこれは誰かが伝えていかなきゃいけないと思った」(1年)など、伝える経験を通して、沖縄戦への理解が深まった、伝える難しさや重要性を感じたという声が寄せられた。「とても緊張したが、いい経験になって良かった。少しでも多くの人が戦争についての出来事を知ってくれたら嬉しい」(2年)といった、生徒がすでに伝える側となっていることがわかる感想もあった。

クラス担任の先生からも、「事前準備・指導のおかげで、大人しい図書委員さんが皆の前でしっかり進行して、話しができた。本番は、クラスでおしゃべりが少しあったが、周囲で注意してくれる様子が見られたり、何より図書委員さんの声が大きくなっていったりと、自分たちで操作確認やグループ巡視などしてくれて、とてもとても成長した様子が見られました!」などの報告があった。



南部商業高校・やえせ高等支援学校 ワークショップ後に、アンケートを記入する生徒たち。中央は担当の下地孝子先生。 2023年5月1日



南部商業高校・やえせ高等支援学校の図書館に展示された「沖縄戦とひめゆり生徒」のパネル。沖縄県平和祈念資料館の実物資料や沖縄戦関係の書籍も紹介されていた。 2023年6月14日

「国際平和ワークショップ」(沖縄県主催)での実施

10月14日、「国際平和ワークショップ」(沖縄県子ども生活福祉部女性力・平和推進課主催)に講師として招かれ、「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」を実施した。県内の7つの高校から生徒33人、サポート役の大学生5人、教員・社会人5人、合わせて43人が参加した。沖縄平和賞受賞団体のひとつとして、資料館の活動を沖縄の若い世代に伝えるという趣旨である。当館にとっては、向陽高校、南部商業高校・やえせ高等支援学校に続いて、他の高校の生徒にピア・ガイドのトレーニングを行う機会となった。

最初に、JICAの島田具子さんが「国際協力による平和構築」について講演と質疑応答を行った。カンボジアの地雷・不発弾問題や平和博物館、コロンビアの平和教育に、沖縄の経験が役立っていると聞き、生徒たちは非常に関心を持っていた。

その後は、私が「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」(3時間)を担当した。参加者は別々の学校から集まっているため、「どこの学校か」、「出身地はどこか」、「沖縄戦の関心度と知識は?」と質問し、回答に応じて移動してもらった。出身地ならではの沖縄戦学習があったかと聞くと、北谷町の生徒は「米軍上陸地」、糸満市の生徒は「激戦地」と答えてくれた。

次にコミュニケーションの練習を行った。上手な聞き方、下手な聞き方にはどんなものがあるかを確認した後、ペアになって下手な聞き方をやってみると、話しにくい、話したくなる、との感想が出た。上手な聞き方をやってみると、話が盛り上がり、話し手も聞き手も生き生きとした表情に変

わった。生徒たちは、練習を通して、聞くことの大切さを理解していった。グループの緊張をやわらげ、参加者同士がうちとけるきっかけにもなった。

午後は「ひめゆり入門Q&A」、「フォトランゲージ」、「ガイドの練習」、「グループの話し合い」を行った。終了後、参加者からは、今までは戦争については「辛いとか怖いとか一言で終わるような感想しか思わなかったけど」、グループの話し合いで自分にはなかった視点や意見が聞けて、これから自分が何をしたらいいのか考えたという感想や、「同世代の普段会うこともないみんなと出会えてすごく不思議で忘れられない時間」になったという声が寄せられた。こうした反応から、上の世代が下の世代に教えるだけでなく、同世代と対等な立場で学び、話し合うことが若い世代にとって大きなインパクトになるとわかった。



国際平和ワークショップ 2023年10月14日
写真提供：沖縄県子ども生活福祉部女性力・平和推進課

対話を促すピア・ガイド

平和教育については沖縄でも、戦争体験者の高齢化、教員の多忙化や時間確保の難しさ、マンネリ化など、多くの課題が指摘されている。しかし、現場の努力によって、展示や朗読、創作ダンス、演劇や音楽など、多彩な取り組みが行われてきた。生徒会や図書委員会での戦跡めぐりや、地域での平和学習で学んだ生徒が全校集会で発表する例もある。生徒が学んだことや、感じたことを他の生徒に伝えるという点はどの方法も共通しているが、展示を使ったピア・ガイドの場合は、説明や問いかけによって、他の生徒たちに対話を促すところが特徴である。

資料館としてはできれば今後も「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」を実施したいと考えているが、学

校に平和学習の予算がない中、ボランティアで学校への職員の派遣を続けるのは難しいため、実施の回数や時期については課題が残されている。

館長レポート「スペイン・ゲルニカ訪問の旅」

ひめゆり平和祈念資料館館長 普天間朝佳

1. はじめに

9月4日から12日にかけて、スペインを訪問した。目的は、無差別爆撃の先駆けの地となったゲルニカの町を訪ねることと、それをテーマにしたピカソの「ゲルニカ」の絵を見ること、そして現地の平和博物館や平和団体の方々と交流することであった。東京の旅行社「株式会社たびせん・つなぐ」の企画で、全国各地から23人が参加、沖縄からは佐喜眞美術館学芸員の上間かな恵さんも一緒だった。以下はその旅の報告である。



2. ゲルニカ無差別爆撃

ゲルニカはスペイン北部のバスク地方ビスカヤ県にある小さな町である。バスク地方はスペインの中でも独特の歴史や文化や言語を持ち、中世以降、スペインの歴代の王によって自治の特権が認められてきた。19世紀に特権は剥奪されたが、1979年にはスペイン国会において再び自治が認められる。町の中心の小高い丘にある「ゲルニカの木」(樅)の下は、中世以来バスクの人々が自治の会議をした場所であり、スペインの諸王たちがバスクの自治を誓ってきた場所でもある。「ゲルニカの木」は自治と民主主義の象徴となっている。

第二次世界大戦直前の1937年4月26日、そのゲルニカの町が突然の無差別爆撃に見舞われる。当時、スペインは共和国政府とフランコ将軍が率いる右派との内戦状態にあり、フランコ



自治と民主主義の象徴となっている「ゲルニカの木」

将軍と手を組んだナチスのドイツ軍が無差別爆撃を行ったのである。爆撃によって町の85%以上が破壊され、1600人以上の人々が亡くなった。ゲルニカが爆撃された理由は、前線に近かったことや兵器工場があったことなど諸説がある。このゲルニカ爆撃は、焼夷弾が本格的に使用された初の空襲であり、敵国民の戦意をそぐために行われる戦略爆撃の先駆けであったとされている。

3. ピカソの「ゲルニカ」の絵

ゲルニカへの爆撃の事実を知り、現代美術の巨匠であるスペイン人のピカソはショックを受け、激しい憤りからられる。ちょうど、スペイン共和国政府からパリで開催される万博のスペイン館に展示するための絵を依頼されていたので、この爆撃をテーマにした「ゲルニカ」の絵を一気に描き上げ、出品したのである。

「ゲルニカ」の絵は、現在、マドリードの国立ソフィア王妃芸術センターに展示されていて、この絵を観るために世界中からたくさんの人々が訪れている。今では世界的に有名なこの絵も、当初はあまり評価されていなかったようである。「抽象的に表現されていて、深刻なスペインの状況が伝わってこない」などの批判を受けたのである。

「ゲルニカ」の絵は、縦約3メートル、横約8メートルの大きな作品である。この絵には、具体的な戦闘場面が描かれているわけではなく、軍隊や兵器も登場しない。しかし、戦争による人々の恐怖や苦しみ、悲しみ、その感情のすさまじい切迫感が描かれ、見る者に迫ってくる。この絵は、写実的でないがゆえに、すべての戦争の本質を描き、普遍的なものとなっているという評価がある。

そして大事なことは、戦争で苦しむのは一般市民であり何より女性や子どもたちであるという戦争の本質が、この絵には表現されていることだと私は思う。そしてそれは、沖縄戦にも共通する、現在のウクライナやガザでも不変の戦争の本質である。



ピカソの「ゲルニカ」

4. ゲルニカ平和博物館との平和交流

ゲルニカ平和博物館（Museo de la Paz de Guernika）はゲルニカ無差別爆撃を伝えるミュージアムである。単にその歴史を伝えるだけでなく、参観者に平和とは何かを問いかけ、参観者とともに平和のためには何が必要かを探っていこうという姿勢を打ち出しているミュージアムでもある。さらに、被害者と加害者の「和解」に向けた取り組みも重視している。

展示室は4つの部屋から構成され、それぞれ①平和とは何か（導入展示）、②ゲルニカで何が起きたか（ゲルニカ爆撃の展示）、③生存者が語る爆撃（証言映像の部屋）、④今、世界で人権はどうなっているか、というテーマを設定している。

展示室を案内してくれたイラツェ・モモイティオ館長は、とてもパワフルで情熱的な女性だった。「平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）」の共同代表も務めていて、今回の企画に全面的に協力をしてくれた。展示見学後、爆撃の現場などをめぐるゲルニカ・メモリアルツアーが行われたが、紙幅に限りがあるので割愛する。

メモリアルツアー後の交流会では、イラツェ館長からゲルニカ爆撃の実態や加害者ドイツとの戦後の和解の歩みについての話を、教育部門責任者のイドイアさんから様々な教育普及プログラムの活動報告を聞いた。スペインの方々や平和活動や平和教育にこんなにも熱心に取り組んでいるということを知り、敬意を抱いた。

ひめゆり資料館から普天間が、佐喜真美術館からは上間かな恵さんが館の紹介や活動報告を行った。イラツェ館長らは沖縄戦のことを初めて知ったと驚き、とても興味深いプレゼンだったと感想を述べてくれた。また、当館に年間50万人近くの方が訪れると知って、とても驚いていた。

質疑応答では様々な質問が出たが、参加者からの「とても素晴らしい取り組みをされているが、どれぐらいの効果を生んでいるのか。日本ではこのような平和の取り組みをやっても、なかなか実績が見えないと感じている」という質問に対して、イラツェ館長は「私たちも同じ焦りを感じている。平和構築の取り組みはアリのような足取りだ。暴力のほうが力が強いし、引きこまれる。見学した人が一人でも多く、考えを変えてほしい。それに望みをかけている」と答えていた。その未来への希望を失わない姿勢に強く励まされた。

最後に、これからも互いにネットワークをつなぎ、交流していきましょうと確認し合った。



イラツェ館長によるゲルニカ平和博物館の展示案内



当館の活動紹介などのプレゼンを行った

5. スペイン平和研究協会との平和交流

マドリードでは、スペイン平和研究協会のみなさんとの交流の機会を持つことができた。

同協会の目的は、紛争のない世界を目指すということ。具体的には①兵役義務への反対、②NATO加盟への反対、③核なき世界を目指す、④軍縮の4つの活動をしている。

1975年にフランコ政権が終わり、80年代にいろいろな活動団体や研究所が開設された。その後、横の連携を強めようという動きが出てきて、97年にスペイン平和研究協会が設立された（32団体が所属）。

同協会では年に1回、顕著な活動をしている団体に賞を授与している。2011年から平和首長会議に参加。非核運動にも参加し、国連や他の団体と連携して、核の恐怖を市民に教育する活動を行っている。

まず初めに、私と上間さんから館の紹介や活動報告を行った。同協会のアン会長は「ひめゆりでも佐喜真でも平和を構築するスタッフを教育していると聞いて、私たちが若い人を教育している取り組みと共通すると思った」と話した。

アン会長から「入館者が見学後、どのように変わったかを知る方法があるか」という質問を受けた。当館からは、「最後のコーナーで来館者に感想や意見を書いてもらっている。一番多いのは「初めて知った」と驚く感想文。日本国内の人でも初めて知ったという方が多い。日本で使用している教科書でも沖縄戦について少し触れてはいるが、それだけでは何があったのかほとんど分からない。スペインでもゲルニカのことを教科書に出てくるが、その内実についてはあまり知られていないと聞いたが、それと共通するのではないかと回答した。みなさん、うなずいて共感してくれた。



スペイン平和研究協会のメンバーとの交流

6. おわりに

今回の旅は、ハードスケジュールで、言語の壁もあり、深く交流することができたとは言い難い。それでも、市民が戦争に巻き込まれ多大な犠牲を払った歴史や自治・民主主義が重要であるという認識を共有し合い、平和活動や平和教育に携わる者として互いに励まされ、また今後も交流をしていくための大事な機会になったという点で重要な旅であった。



ゲルニカ平和博物館にて

2023年度博物館実習生レポート紹介

2023年7月1日から7月7日まで博物館実習を行い、八洲学園大学の小峰健太郎さんと東京大学大学院の本間貴裕さんの2名を受け入れました。ふたりとも様々なことに関心を持ち意欲的に実習に取り組みました。ここでは、実習を通して学んだことを元に小峰さんがまとめた当館への提言をご紹介します。

実習生
レポート

ひめゆり平和祈念資料館での「360度映像」の活用に関する提言

八洲学園大学 生涯学習学部 小峰 健太郎

1 はじめに

戦争の経験者が少なくなっていく中、太平洋戦争ひいては沖縄戦についてを継承していくために、資料館はなくてはならない場所だと感じた。

しかしながら、来館された修学旅行生などを観察していると、熱心にキャプション等を読んだりしている様子はあまり見られず、展示を見ながら回答するワークシートなどが配られている学校では、回答を書き写したら次の問題の答えが書いてある場所に移動するといった様子が見られた。館内を見ている目的が「展示を見ること」から「問題を解く」ということになっていると感じた。これらの様子を見て、若い世代での認知度や関心をあげていくこと、自発的な興味

を持ってもらう事は大きな課題と感じた。また、近年蔓延した新型コロナウイルスの影響を大きく受けた資料館の入館者の減少、それだけでなく存続まで危ぶまれたとの話があった。現在は回復基調になっているが、再び同様のことが起こり入館者が減少すれば、それだけ人々に沖縄戦を継承する機会が減少するということになる。

これらの課題に対して、もっと若者世代がアクセスしやすく関心を持ちやすい、また実際に資料館に足を運ぶことが難しい来館希望者に対しても、資料館の展示が身近に感じられる取り組みとして「360度映像」が活用できるのではないかと考えた。

2 「360度映像」とは

「360度映像」は従来のYoutubeなどの平面的な動画とは違い、カメラのレンズに移った360度の様子の全てを録画した映像である。Youtubeなどの動画プラットフォームでも360度動画を投稿できるサイトが増えており、通常の動画と比べた360度映像のメリットとして高いリアリティ・没入感・エンゲージメントの向上があげられる。

まず、高いリアリティとは実際に資料館にいるような気にさせることである。専用のカメラで撮影した360度映像はPCを使用して画面上で見られることもできるが、専用のゴーグルを使用すれば自身が目を向けた方向に画面が回転して映像が展開する。こうした視野全体を覆うような映像を提供できるため、実際に資料館にいるようなリアリティのある体験をもたらすことができる。

次に没入感については前述したリアリティと重なるが、

360度映像は視野全体を覆うような映像が特徴である。視聴者は360度を自由に見回すことができ、まるで資料館にしているような錯覚、「没入感」を味わう事ができる。

最後にエンゲージメントの向上についてだが、高いエンゲージメントとは視聴者が強く興味を持っている状況である。従来の平面的な映像と比較し、自由に視点を動かせる360度映像は視聴者の興味を引きやすいだけでなく、飽きやすい小学生などの低年齢層の視聴者でも長時間の視聴を期待できる。

360度映像は前述したようなメリットがあることから、イギリスのブリティッシュ・ミュージアムやフランスのルーブル美術館などバーチャルツアーを提供している博物館や美術館がある他、観光業界においてもリアルな観光体験を提供し、観光のプロモーションにも利用されている。

3 どのように活かせるか

ひめゆり平和祈念資料館において360度映像がどのように活かせるのかを考えると、まずひめゆり学徒隊がどのような環境で働いていたのかを視聴者に対してリアルに再現できることがあげられる。ひめゆり学徒隊は沖縄陸軍病院において日本軍と行動を共にした。この際、南風原病院壕や糸数アブチラガマ、山城本部壕といった人工壕や自然洞窟において看護補助として勤務していたが、各洞窟内を360度映像において撮影してバーチャルツアーにすることによってキャプションだけでは伝わらない、洞窟内のリアルな様子を視聴者に見せることが出来る。これによって言葉だけによる説明よりも、実際の洞窟内の様子を360度映像を通して自分の目で見る事が出来るので視覚的な記憶として残すことができる。また、高い没入感によって当時の状況をより深く共感・感情移入することが期待できる。そして、360度映像に付け加える形で当時の医療用器具や着ていた衣類などを見せることでより強く印象に残るのではないだろうか。

また前述したバーチャルツアーの映像を撮影する際に、語り部が実際に話をしながら撮影することによって、現在よりも気軽に語り部の案内に触れることが出来ると思う。洞窟内という閉鎖された空間に怖くて入ることが出来ない人や、身体的理由や新型コロナウイルスのような感染症が蔓延した際でも、実際に入壕したり訪問したりせずとも360

度映像を使用することで壕内の様子を見てみたいというニーズをカバーできると考えた。

バーチャルツアーは洞窟内の映像だけでなく、館内の案内においても有効だと考える。実習中に「展示室に案内人が立つ人員の余裕がない」というお話があったが、こういった技術を取り入れることで資料館側の事情にも寄与できるのではないかと考えた。撮影したバーチャルツアーは幅広い年代が視聴するプラットフォームであるYoutube上に投稿したり、HP上にアップロードしておくことで、若者世代だけでなく全世代にアクセスしてもらえる可能性も上がる他、修学旅行などの事前学習にも使用できる。

最後に360度映像自体が貴重な資料となる点が挙げられる。ひめゆり学徒隊が勤務した洞窟群は補強などがされているが、突然の崩落の可能性もありいつまで残るか分からない実物資料である。また、補強などで手を加えていくことで安全性は担保されつつも、元々の形状からかけ離れていってしまう可能性もある。このような変わりゆく環境を日々映像に残すことによって、壕やガマに入ることが出来なくなった時にもバーチャルツアーに使用出来たり、崩壊前の状況を知ることが出来る学術的に貴重な資料となるのではないかと思う。

4 まとめ

以上のように360度映像を撮影し、インターネット上の動画プラットフォームやホームページ上で閲覧できるようにしたり、館内の一部に「VR体験コーナー」といった形で公開することで、沖縄戦やひめゆり学徒隊に関する情報に今までよりも気軽に興味を持ってもらえるのではないかと考えた。もちろん、360度映像を使用するまでにはコスト面や技

術的な課題、体験コーナーを設置した場合は怪我や機器が壊れないように配慮しなければいけないなどのデメリットも存在している。しかしながら、こういった技術を進んで取り入れSNSなどで積極的に情報発信し攻めの姿勢に転じていくことも、情報過多となった現代社会では必要なのではないかと考える。



実習生の小峰さん(左)と本間さん(中央)の館長とのディスカッション

仲宗根政善日記抄(67)

(1980年) 六月二十一日

天久節子さんが八重山からお土産をどっさりかかえて訪ねて来てくれた。終戦後、八重山に初めて講演に出かけたとき、会場に最初にかけつけてくれたのは天久さんでした。八重山の方言調査に行ったときも、お母さんの経営していた旅館にとめてもらって、親切にしてくださいました。ちょうど台風が襲って来て、雨戸も吹き飛ばされ、ご家族といっしょになって、台風とたたかっただけでもありました。父親は中風気味であったが、その後まもなくなくなられたという。

慰霊祭が近づくと、必ず八重山からやって来てくれる。八重山出身の生き残りは、とくに親しそうである。島に住んでいるせいでもあろう。戦後しばらくは、交通が不便で慰霊祭にも参加出来なかったが、この頃は、必ずやって来る。慰霊祭が近づくと、そわそわしてじっとしておれないのである。かつて八重山に行ったとき、皆であつまってくれた。戦争中の思い出話はつきない。こんなこともあったのかと、想像もつかない耳新しいことが出て来る。生命の深みにふれて来た者同志の間には、いつも生命のにおいがただよ々と直感した。

慰霊祭の度ごとに訪ねてくれる、そのことばにも生命の深みにふれたひびきがある。百十一名も戦死している。その中から生きのびて、そうして人の親となり、仕合(せ)にくらしている。その子や孫もさらに未来にむかってさかえて行く。しかし、亡くなったものは、一切これで終わったのである。死と生とのへだたりのいかに遠いものかを実感する。生きている者同士の間には、死の深淵から浮きあがって来て、つよいきずなで結ばれている。(略)

(1980年) 六月二十二日

(前略) 夏の空は澄みわたって美しい。明日は慰霊の日。あの空をみつめていると喜屋武断崖の岩かげにひそんでいたときのことを思い出す。一昨二十一日だった。平良松四郎・平識善徳と三名に引率された生徒たち、約四十名ばかりが喜屋武断崖の岩かげで、水にうえ食にうえ、空腹をかかえて、青い海を、白波の岩にくだけるのをみつめていた。追いつめられ追いつめられてここまで来て、これからどうしようという考えもうかばず、岩にもたれたままであった。岩の割れ目からのぞかれる青い空は、今日(の)ように澄みきっていた。白雲が流れ、その中を敵機がつぎつぎとけたたましい爆音をたててすぎた。

死を待てる巖の割れ目に青空の清く

すみいて白雲流る

じっとあの青空を流れる白雲を眺めていたのである。

やがて船艇はわれわれの正面まじかに来てとまった。皆は岩にへばりつき、化石のようになって身をちぢめた。発砲があればもうひとたまりもない。船艇の中の敵兵の動作もはっきり見えた。誰もが、もうこれが最後だと観念して、じっと眼をつぶったのであった。幸い発砲はなかった。やがて船艇は静かに動き出した。青い海ばかりが目の前にあ

る。一同は巖の上にはねおきた。そうして巖をよじのぼっていった。

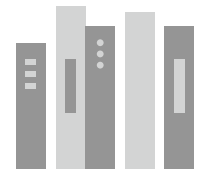
思いがけず、福地キヨ子が先生と寄って来た。福地はわれわれといっしょに陸軍病院の勤務についた生徒ではなかった。手に負傷しているらしく白い繃帯をまいていた。他の部隊にはいり、その隊といっしょにのがれのがれて来ていたのである。先生といっしょにつれて行って下さいと歎願していた。もういっしょに行動をとるべきときではなく、一人一人が活路を見出さなければならないときであった。私ははたと返事に窮した。福地はわずかばかり水のはいった水筒をさし出して頭をさげた。いっしょにつれて行って生かして下さいというよりはいっしょに死なして下さいと歎願しているように見えた。たった一人で、兵隊の中に入れて負傷もし追いつめられている。窮鳥懐に入るとはこのことである。ではお友達といっしょになりなさいというと、ためいきをつくようにほっとしていた。私は兵隊たちにいるいろいろお世話になりましたと、深くお礼をのべて、福地をひきとった。兵隊は、自らの水筒の水をわけてくれた。日本兵はわるいわるいと世間では言っている。しかし、こうして生徒をかばってくれた兵隊たちも大勢いたのである。福地はこの奇遇を神仏のひき合せと感謝した。もしここで皆と出逢わなければ、あるいは、福地は、沖縄最南端のあのジャングルの中で最期をとげたと思う。福地は、気性もはげしく、気丈夫であった。最後の学芸会で、大石良雄を演じてかっさいをはくした。大石にうってつけだった。

二十三日、十二名の生徒は三箇の手榴弾を持ち、車座になって自決の態勢をとっていた。福地がその指揮をとった。突然敵兵に包囲されたとき、福地は、先生もういいですかと、鋭く私に眼をむけた。駄目だ!よせ!今死ぬのではない。待て!と強く制止した。福地は手榴弾をおいてくれた。まことに危機一発の一瞬であった。今考えてもぞつとする。もし栓をぬいたら、十二名は無残な最期をあの上でとげている。この生徒の最期を放置してはおそらく自分一人おめおめ生きのびて投降することは出来なかったであろう。運命とは不思議である。

福地は、今も口をかんして戦争の話はしないという。学友ともあわない。伊江島に教師をしている。夫も失った。戦争体験が福地をかんでいる。はげしい気性がどう内心でたたかいつづけているのだろうか、いつもあの奇遇の瞬間、手榴弾をにぎりしめていた危機一髪の瞬間を思いながら思いつづける。戦争体験にうちひしがれることなく、平和を創り出す遅し(い)力が生れてくるようにと、あの伊江タッチューを思い浮かべながら、いつも福地のことを思う。

※読みやすさを考慮して、旧字体は新字体へ変更した。明らかな誤字は改め、脱字や送り仮名、その他必要な情報を()で補った。

※適宜省略し、(略)などで表した。



ひめゆり平和祈念資料館（以下「資料館」と略記）のガイドブックが、『公式ガイドブック ひめゆり平和祈念資料館』（以下『ガイドブック』と略称）として刊行されたのは1989年12月23日。同書は96年、99年、2000年5月、そして12月と4回にわたって改訂を重ねていた。

資料館が開館したのは1989年6月23日。開館後間もなく刊行された『ガイドブック』は、資料館の展示内容を余すことなく伝えていた。ちなみに初版の「もくじ」を見ると、次のようになっている。

1「第一展示室 沖縄戦前夜」、2「第二展示室 南風原陸軍病院」、3「第三展示室 南部撤退と喜屋武半島」、4「第四展示室 鎮魂」、5「第五展示室 回想」。

記録写真は無論2、3、4には体験者の証言を掲載。理解を助けるため「用語解説」を付していた。

開館、および『ガイドブック』の刊行から15年目、「資料館」は、建物の増築、修理とともに、展示室をリニューアルする。それは、展示物の説明文が、若い世代には難しくなってきたといったこと、それ以上に、沖縄戦の「体験を、単なる過去の、そして一地域だけの出来事として見るのではなく、人類社会全体を念頭において、現在そして未来を見通すきっかけ」になるようなものになりたいということによるリニューアルであった。

2004年8月15日、「資料館」は、『ひめゆり平和祈念資料館 ガイドブック（展示・証言）』を刊行。それは次のようになっていた。

1「第1展示室 ひめゆりの青春」、2「第2展示室 ひめゆりの戦場」、3「第3展示室 解散命令と死の彷徨」、4「第4展示室 鎮魂」、5「第5展示室 回想」、6「第6展示室 平和への広場」。

それぞれの「展示室」について触れておけば、1は、平和な時代の学園から動員までを、2は、看護活動から南部への移動を、3は、解散命令後の様子を、4、5は変更なしで、新規増築に伴い「第6展示室」を設け、特別展が出来るようになる。

リニューアルで展示が大きく変わるとともに、1には、タッチパネルの導入、2には、三台の証言モニターを置き、3には、生存者の証言と米軍のフィルムを利用した大型スクリーンの設置といったように先端機器をとり入れ、設備の充実をはかったことで、おのずから『ガイドブック』第二版もかわっていく。第二版では、証言は、そのまま引き継ぎ、米軍の侵攻及び風景写真等の大半を入れ替え、教師と生徒の手紙等を加えていた。

第一版と第二版との違いについてあと少し付け加えておけば、第二版は「すべての解説文を生存者が書き上げた」といったことがある。「コンセプト作りから完成まで」関係者と議論をかさねながら、証言者が中心になって完成させたということである。

2004年のリニューアル前から、「資料館」では、「館内での生存者による語り継ぎができなくなったときに備え、対策を講じる必要があるのではないか」という意見が出始めるようになる。そこで、どうすれば証言者たちのあとを継ぐ若い世代の育成ができるかの討議がはじまり、「次世代プロジェクト」の「懇談会」が開かれていく。

次世代プロジェクトが、実を結んだとっていいのが、2021年のリニューアルであった。リニューアルは当然新しいガイドブックの制作ということになるが、それが刊行されたのは2023年3月30日。第三版『ひめゆり平和祈念資料館ガイドブック 展示と証言』の誕生である。

第三版は、次のように構成されている。

1「ひめゆりの学校」、2「ひめゆりの戦場」、3「解散命令と死の彷徨 6・18」、4「ひめゆりの証言映像」、5「鎮魂」、6「ひめゆりの戦後」、7「各学校の慰霊碑」、8「ひめゆり学徒の証言」。

第三版は、これまであった第一、第二といった「展示室」表記を消し、真っ先に、学園での澆刺とした生徒たちの姿をとり入れている。その様子が、その後の悲劇を一層際立つものになっている。

第三版が大きくかわったのは、展示室もそうだが、多くの挿絵を用いたことにもある。挿絵の生んだ効果は実に大きかった。まず、写真にはない場面が絵で再現されたといったことがある。それが、人々をひきつけた。実物だついで目をそらしがちになるが、挿絵を用いたことで、注視するようになった。「証言」は日にちを追うように整理し、巻末にまとめている。

第三版は、戦後を付け加えたことで、とかく沈鬱になりがちだった気持ちを明るくしてくれるものとなっている。そのような構成が出来たのは、リニューアルそして第三版が、全員戦後生まれの世代によって作り上げられたということによっていよう。「資料館」の次世代プロジェクトが成功した証左である。

第三版は「戦争からさらに遠くなった世代」へ伝わるようにしたことで、わかりやすくなったと好評である。しかし、わかりやすくなったことで、何か大きな落としものをしてしまったのではないかという気がしないでもない。

ホームページが新しくなりました

2023年6月、当館の公式ホームページをリニューアルいたしました。
今回のリニューアルは、より見やすく分かりやすいホームページを目指して行いました。
デザインを一新し、知りたい情報をより早く見つけることができるよう、構成を見直しました。新しくなったホームページを、ぜひご活用ください。



<https://www.himeyuri.or.jp>



スマートフォンでも見やすくなりました

団体プログラムのご案内 多目的ホールご利用について

当館を見学する団体を対象に、多目的ホールにて職員による平和講話（約40分）やビデオ視聴（約30分）を実施しています。事前予約が必要です。お電話にて空き状況を確認後、FAXかメールで申込書をお送りください。なお、多目的ホールは、セレモニーなど、平和講話、ビデオ視聴以外でのご利用はお断りしています。

▶ 利用時間 9:05～16:00（最終開始時間）

- 年末年始（12月30・31日、1月1日～3日）、旧盆（旧暦7月13日～15日）、慰霊の日前後（6月21・22日、24日）はビデオ視聴のみ予約可能です。
- 慰霊の日（6月23日）は平和講話・ビデオ視聴ともに予約できません。
- 予約時間に遅れた場合、予約状況によってはキャンセルとなる場合もあります。
- 収容人員は約200人（席）です。

★2024年4月より会場（多目的ホール）使用料がかかります。
詳しくはホームページをご覧ください、当館(098-997-2100)までお問い合わせください。

【会場使用料に関するお知らせ】
(PDF)はこちら



Information

- ・ 開館時間 9:00am - 5:25pm（入館締切は5:00pm）
- ・ 年中無休（台風などで路線バスが運休の場合は休館）
- ・ 入館料 [個人] 大人450円 高校生250円 小中学生150円
[団体] 大人400円 高校生200円 小中学生110円

※団体料金は20名以上、一括払い。
※団体入館は予約制です。
必ず事前にご予約ください。

ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより
第72号 2023（令和5）年11月30日発行

【編集・発行】

公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館
〒901-0344 沖縄県糸満市宇伊原671-1 TEL098-997-2100 FAX098-997-2102

ひめゆり平和祈念資料館

検索

<https://www.himeyuri.or.jp/>

